

森鹿三監修『水経注(抄)』訳を論評す

陳 橋 驛

(訳) 金 秀 雄

日本の著名な水経注研究者、京都大学名誉教授故森鹿三氏の監修翻訳になる日本版『水経注(抄)』は、鄭道元注唯一の外国語翻訳書である。本書は、東京、平凡社の『中国古典文学大系』第二十一巻に収められ、一九七四年に出版された。水経注研究の同僚として、私が、一九七五年版『東洋学文献類目』に本書が記載されているのを見た時、その喜びの情は筆墨に表し難いものがあつた。さらに、感謝に耐えないことは、先頃、森鹿三教授の高弟であり、本書翻訳者の一人でもある関西大学藤善真澄教授より、一九七七年版の本書が寄贈されたことである。拝読するに感慨実深く、我国千古の名著が、森鹿三教授等学者の入念な翻訳によって、ついに日本学术界に美事な花を咲かせ、中日両国の学術交流に残したその功績の偉大さは、まことに賞賛に値するものがある。

森鹿三氏が本書の巻末に記された「水経注解説」によると、本書の翻訳作業は非常に慎重で精密なものである。「河水注」の五巻は、森鹿三氏と本書のその他の翻訳者が、原文に対する共同研究と討論を重ね、そうした上で大阪大学の日原利国教授が書き下し文に改め、最後

に藤善真澄、勝村哲也両氏がこれを現代語に翻訳した。本書の他の部分は、京都大学名誉教授、日比野丈夫氏によって翻訳されている。従つて本書は、森鹿三氏の指導の下に、日本の水経注研究者を一炉に熔かせてできあがつた共同訳書であり、注目に値するものである。総じて言えば、『水経注(抄)』は、非常に成功した翻訳書である。

その一、日本の学者が、この歴史的名著を翻訳するにあたり、底本の選択について、彼らの鑑別能力を充分に発揮していることである。現存している鄭注版本は(稿本及び写本を含む)最も古い宋刊の残本から、近世の『水経注疏』に至るまで、数十種を下らない。これら版本間には、常に文字の異同が見られ、内容にも大変な差異がある。従つて底本の選択は、翻訳作業の重要な鍵となつている。本書巻頭の凡例中の説明によると、本書は、清の王先謙の『合校水経注』を底本としていているという。このような選択は、疑いもなく日本の学者の深思熟慮の結果である。私は嘗て「論水経注的版本(水経注の版本を論ず)」という拙文の中で、合校本を「清代最後の鄭注善本である」と述べておいた^①。というのは合校本は、読み方が完全に殿本のそれに従つてゐるからである。殿本に対して、私は嘗て「殿本以後の多くの版本は、その注疏考証にあたり、当然、殿本よりも詳細を尽くしてはいるが、校勘の成果という面では、大体のところ、やはり殿本の水準を出てない」と論じた^②。従つて、私は「一七七四年の殿本こそ、この一時期を代表する最高水準の版本である」と認めている。このことから、日本の学者が読み方においてすべて殿本に従っている合校本を選び、それを翻訳の底本としたということは、とりもなおさず彼等の翻訳書のために確実なる基礎を打ち立てたことにほかならないのである。

その二、『水経注(抄)』は、この信頼すべき合校本の善本を底本と

した以外、さらにその他多くの著名な水経注研究者の注疏の精華をも吸収していることである。本書、凡例中に列記されている、その他に参照した版本には、楊守敬、熊会員の『水経注疏』、及び朱謀埠、全祖望、趙一清、王先謙、岑仲勉など諸家のものが含まれている。この外、森鹿三氏は卷末「水経注解説」の中で、また最終的に、台湾省中華書局、一九七一年、出版の『水経注疏』を参照したことを述べている。同書は、一九五五年、科学出版社、影印本『水経注疏』中の標注と同様に、「宜都楊守敬纂疏」、及び「門人枝江熊会貞參疏」とあるほか、さらに、楊、熊氏の「標注」の後に「郷后學校江李子奎補疏」の字句がある。森鹿三氏は、ことさらに書中には李子奎の按語がたくさんあることを指摘し、これらの按語の中から、古來流伝されてきた戴氏夔趙の説が事実ではないという可能性のあることを証明できるとしている。

ここでついでに述べると、私は数十年来水経注研究の過程において、拙著「論水経注的版本文」に列記したように、極力国内の公私所蔵の各種鄭注刊本、写本、稿本を閲読すべく努めてきた。私が閲読し得た鄭注版本は、既に『東方文化研究所漢籍分類目録』に著録されている十三種の版本中に含まれている。残念ながら、今もって台湾省版の『水経注疏』を閲読していない。こういう訳で、『水経注抄』中、李子奎の按語を引用した部分については、批評を加える術がない。とはいふものの、私は本書に収められている各種鄭注版本の校勘成果を発見するにやぶさかでない。本書は合校本を底本としているけれども、日本の学者は、明らかに合校本、つまり殿本の読み方には拘泥せず、慎重な推敲をへて、その他の版本中確かに殿本より優れた成果とみなすものは採用している。第一巻の河水注だけでも、「条三弥」（殿本と合

校本は「条王弥」に作る）、「伽那調洲」（両本とも「伽那調御」に作る）、「罽繞夷城」（両本とも「罽賓繞夷城」に作る）、「加耶城」（両本とも「加那城」に作る）、「多摩梨帝国」（両本とも「多摩梨軒国」に作る）、「担袂」（両本とも「担株」に作る）等のように、入念な校勘をへた改易を伺うことができる。その余の各巻でもみなこのようである。第四巻、河水注の「鯉魚澗」以外これらすべての字句の改易は、いずれも信用でき典拠のあるものである。

その三、『水経注（抄）』の翻訳者達の大変な労力が、文章の翻訳と上述した各家の校勘成果を吸収する以外、ことのほか彼らがこの訳書のため作った大量の注釈に表れていることである。本書に引用され、私が今もって見えていない台湾省版『水経注疏』を除き、本書は、あらゆる鄭注版本の中で最大の注釈量を有する版本であることは疑いもない。わずかに「河水注」の五巻の中でも、翻訳者達は合計千百十四条の注釈を施しており、その字数は正文の字数を超えている。注釈量が膨大であるため本書は、書写の体裁を従来、鄭注版本の伝統である、注釈文を正文の下に二行で書き入れるという「割り注」形式を打ち破らざるを得ず、番号順に各巻末に排列するという形式を採用している。注釈は、当然のことながら、各種版本の精華を吸収しているが、その内、かなりの条目が獨創性を備え、一部条目は従来踏襲されてきた誤りを正している。また、文字及び語源に関する条目では、直接外国語を引用しており、これも従来他の版本には見られなかったものである。以下、数例を挙げると次の通りである。

巻一「河水注」注釈四〇

新頭河、Sindhu、也有音訳為信度、新陶、辛頭等的、指今天的印度河。……

〔「水経注(抄)」原文〕新頭河、Sindhu、信度、新陶、辛頭とも音写する。今のインダス Indus 河のこと。

この項の注釈は簡単であるが、「河水注」にしばしば出て来る新頭河、新陶水等の地名が、実は、梵語の Sindhu の違った音訳、即ち今日のインダス河であることを明確に指摘している。

卷一「河水注」注釈九三

条三弥、戴震与楊守敬校本均以三、為王、当系錯誤。条三弥是私阿条国的大富豪之名。見《北堂書鈔》卷一三二和《太平御覽》卷七〇一所引的支僧載《外国事》。

〔原文〕条三弥、戴震、楊守敬の校定では共に三を王とするが誤りである。条三弥は私阿条国の大富豪の名。『北堂書鈔』卷一三二、『太平御覽』卷七〇一に引く支僧載の『外国事』に見える。

この項の注釈は、「条三弥」の説明以外に、さらに殿本と注疏本が条三弥を条王弥と書いている誤りを正している。『水経注(抄)』の注釈は、明らかに正確なものである。殿本と注疏本の原文に言う。

彼日浮因尽境、条王弥更修治一浮因、私阿条王送物助成、今有十二道人住其中。

と。しかし、『御覽』卷七〇一、服用部三、承塵の条に支僧載「外国事」を引用して言う。

斯阿条国有大富長者條三弥、與佛作金薄承塵、一佛作兩重承塵。

と。『御覽』所引の「外国事」から分かることは、条三弥が絶対に私(「御覽」は「斯」に作る)阿条王ではなく、殿本等が条三弥を条王弥と間違えた理由は、つまり、両者の関係を混同したことによる可能性がある。

卷一「河水注」注釈一四二

吉祥草、Kusa、按讀音写作姑尸、短尸、訳为上茅、茆草、是生長在湿地上的 一種茅草、用作坐禪的敷物。

〔原文〕吉祥草、Kusa 姑尸、短尸と音写し、上茅、茆草と訳される。湿地に生える茅の一種、坐禪の敷物にする。

これは、わずかな知的注釈であるけれども、この種の草類の植物学的属性及びその宗教上の用途を言うだけでなく、さらに梵語の語源からもこの言葉を明確に解釈している。思うに、吉祥草は、英語では Kusa 或は Kusta に作り、インド語では Kusa、漢訳では常に姑尸、短尸或は拘舍聖草に作るが、実はすべて梵語の Kusa から出たものである。植物分類学及び植物地理学の角度から見れば、注釈は、なお不足しているところがあるものの、おうかた満足しうるものと言わべきである。

その四、『水経注(抄)』が、成功した他の点は、各巻に地図を付したことである。これと、拙著「編纂水経注新版本御議」で提案したことは、期せずして一致している。異なっている点は、私が将来『水経注』の新版本には各河川ごとに、譚其驥教授監修の『中国歴史地図集』による製図方法で作成した新式地図を付すべきであると提案したのに対し、『水経注(抄)』が付した地図は、楊守敬『水経注図』の中から選んだ旧式の方格地図に過ぎない。もちろん、『中国歴史地図集』の要求に基づいて一部の水経注図を作製することは、決して容易な事ではなく、暫時、楊守敬図にて代替とすることができれば、地図を載せないよりずっとましである。特に本書巻末の「水経注解説」中に現代の新式地図を利用した見取り図一葉があり、本書の各巻に述べられている空間範囲を調べる際、読者は見取り図の示す範囲につき他の新式地図と対照して楊守敬図の不足を補うことができるようになってい

る。その他、本書には若干の写真が挿入されている。例えば、蘭州附近の黄河の水車、黄河の水利工事等があり、写真の内容と注釈文の内容とをどのようにマッチさせるかは引き続き検討されるべき問題であるけれども、写真は強烈な印象を視覚に訴えるものであり、奨励するに値するものであることは間違いない。

その五、『水経注(抄)』には、その編集体裁の面で、なお多くの優れたところがある。例えば、訳者は、書中すべての中国王朝の年代に括弧を付けて西暦年代をあげている。『水経注』には引用書が非常に多く、訳者は、調べるすべの無い散佚書をのぞき各書名の下に、括弧を付けて引用文のもとづく篇名、巻数を注記している。多くの地名、専門用語や、常用されず理解しにくい語彙については、すべて仮名を振り、日本の読者が閲読するのに便利になつてゐる。この他、古漢語は、文法構造上、現代の日本語と大いに異なつてゐるので、一般の日本の読者の閲読を容易にするため翻訳者は、一部理解しにくい語句に若干の字句を付け足している。但し、書き加えた字句はすべて括弧で明らかにし、原文でないことを示している。例えば、巻三の「河水注」に、

服虔曰新秦、地名、在北方千里、如淳曰、(新秦之地在)長安以北、朔方以南也。

〔原文〕服虔は、「新秦とは地名である。北にあつて、方千里」如淳は、「(新秦の地は)長安以北、朔方以南である」……

と、それぞれ説明している。

又、卷十六の「穀水注」に、

其一水自大夏門東徑宣武觀、(其觀)憑城結構、不更增墉。

〔原文〕その(穀水の)一水は、大夏門から東に向かい宣武観を

すぎる。(その観は)城によつて構を結び、余分に墉を増築して
いない。

以上、「河水注」の「新秦之地在」と「穀水注」の「其觀」等の字句は、みな翻訳者が訳文を補足するために加えたもので、読者の便宜を図るため、翻訳者が多大の精力を費やしたことがよく分かるのである。

以上、『水経注(抄)』の成功した多くの点を述べたが、同じ水経注研究者の一人として、本書にある若干の瑕もまた見逃す訳にはいかず、私見を略述し、あわせて中日両国の水経注研究者に教えを乞ふ次第である。

第一に、私は、『東洋学文献類目』中に本書が著録されているのを見た時から、本書に対して満腔の期待を懐いていた。しかし藤善教授から本書が寄贈され、順次読み進むにつれて、もの足りなさを感じたのである。というのは、本書は鄭注四十巻の全訳ではなく、森鹿三氏が巻末の「解説」に言うように、その篇幅は鄭注の四分の一に過ぎないからである。無論、抄訳十巻はすべて鄭注の精華ではあるけれども、中国は領域広大であり、南北の河川にはそれぞれ特色がある。ここに抄訳された各篇は、その地域上からすればわずかに華北の一隅に集中し、水系上でも黄河とその支流に及んでゐるに過ぎない。従つて、本書は日本の読者に入門手引きとして鄭注の一斑を窺わせることはできても、読者に深奥を極め、鄭注の全貌を分らせるように導いていくことはできない。だから私は、日本の水経注研究者が、なお一層努力して、残りの三十巻を完訳しその業を終え、この不朽の歴史的名著に完全な日本語訳が出来るよう、心から希望してやまない。日本の水経注研究者の深い造詣と、『水経注(抄)』が既に収めた卓越せる成果に

かんがみれば、日本における鄭注全訳本の完成は充分期待できるのである。

第二に、先ほど指摘しておいたように、『水経注(抄)』は注釈上喜ばしい成果を収めている。しかし、私はそれでもなおこの方面で、さらに一步を進めた完全無欠さを求めたいのである。何故なら、私がつとに指摘したように、『水経注』は、地理的著作として、その実際の主たる価値は当然、地理学の方面にあるのであつて、あまたの学科がすべて『水経注』から養分を吸収することができるとはいへ、結局は、地理学の角度から、この名著に対する全面的、系統的研究を行うことが、第一義に置かれるべきである^⑩。従つて、『水経注』に対する完全な注釈としては、もちろん、歴史学及び言語学などの方面の内容を排除すべきではなく、また、自然地理学及び人文地理学に関係する内容も削減すべきではない。だが、後者についていえば、『水経注(抄)』はなお充実すべき余地があるように思われる。例えば、『水経注』は、河川の水源、流路行程の記載に大量の地勢学的描写記述がある。「渭水注」の三巻を例にとると、注釈文に記載されている黄土高原の特殊な地勢類型、即ち「原」というのは、積石原、周原等のように十六ヶ所の多きに及ぶが、この種の黄土高原特有の地勢類型、その成因、構造及び外観は、日本の読者が理解しにくいばかりでなく、中国人の読者でも現地を訪ずれたことのない者にとつて想像することはとても難しい。この「原」に対して注釈を加えることが極めて必要であるのは明白である。水文地理の面でもまた、然りである。巻一「河水注」に「河水濁、清澄一石水、六斗泥」という記載があるが、これは何と重要な古代黄河の水文地理記載であろうか。もしも注釈を加えて現代黄河の含砂量と対比することができれば、必ずや重要な意義を

持つことになろう。植物地理や動物地理の方面でも同様であつて、「河水注」を例にとれば、娑羅樹(Shorea robusta)、菩提樹(Ericus religiosa)、胡桐(Populus euphratica)、檉柳(Tamarix juniperina)等のような植物について、もし、漢名、学名を並記する方法で、注釈中に学名を書き、その性状まで記述できたならば、読者に対してきつと裨益するところ大なるものがあろう。巻十五「伊水注」に記載されている鮠魚は、本書に注釈(注釈二十一)されているが、内容は注箋本、七校本、殿本等の文字校勘に限られてはにすぎない。だが、「伊水注」に記載されている鮠魚とは、明らかに今日言うところの大鮠(Megalobatrachus davidianus)〔山椒魚〕であり、両棲類大鮠科の動物である。

日本の学者は、本書に注釈を付ける時、大量の中国古書を引用しているが、このことは大いに必要なことであるの言うまでもない。古書にある多くの資料や論議は、研鑽錬磨を経たのち鄭注の注釈としたものであり、確かに半分の努力で倍の効果を上げることができる。しかし、古書中の一部資料は、既に過去のものとなつて、現状と合わず、しかもその中のあるものは、もはや現代科学によつて否定されていることに注目せねばならない。このような資料は、当然、慎重に扱わねばならない。遺憾ながら、こうした例が、やはり本書の注釈中にも散見される。例えば、巻二「河水注」にある「沢は楼蘭国の北にある」という一文の注釈(注釈七十三)は、つぎのとおりである。

此澤即以所謂、游蕩湖、聞名的羅布渾尔、也有写成塩澤、蒲昌海、牢蘭海、勃澤、輔日海等的。因其系内陸湖、故湖水潛入地下、直達積石山即阿尼瑪卿山、即認為是黄河之源。

〔原文〕この沢がいわゆる「さまよえる湖」で有名なロブ・ノー

ル Lob nor 羅布淖尔である。塩沢、蒲昌海、牢蘭海、渤沢、輔
日海とも書かれる。内陸湖であるため、湖水が地中をくぐって積
石山 アムネマチン Amne machin 山に達し、黄河の源流とな
るといふように考えていたわけである。

この注釈は、実は、中国歴史の中で誤りが次々と伝えられてきた黄
河重源説を繰り返したものである。黄河重源の説は、現代の自然地理
学から見て全く荒唐であるのみならず、古書の中でも杜佑『通典』、
歐陽忞『輿地広記』、万斯同『水経積石辨』等の如きは、早くからその
無稽を指摘していたのである。このことから、この種の注釈のように、
古書を引用して古人の誤りをすべて露呈することよりもむしろ重要な
ことは、現代科学の観点から古人の誤りを指摘することなのである。

第三に、拙著「論水経注の佚文」の文中で、私は次のように指摘し
た。「今日、通行の『水経注』は、いかなる版本にもかかわらず、な
お多くの欠落がある。従つて、嚴格に言うならば、本書もやはり、残
本の一つである」と。このため、鄭注新版本を編纂する際には、それ
ら確認のある佚文に対しては実際に補足しておく必要がある。少なく
とも、注釈の中で、説明しておくべきである。『水経注(抄)』の訳す
るところの十巻によると、その佚文にして、殿本以外の各本及び『初
学記』、『御覧』、『寰宇記』、『名勝志』等の古書中に散見するも
のは、四十条を下らず、その中、信憑性の高いものは、拙著『論水経
注の佚文』に、一、二の両項に分けて列記しておいた。しかし、『水
経注(抄)』の中では、巻三「河水」の経文「又北過北地富平縣西」
注「河水又逕典農城東」の字句に、七校本及び注釈本によつて「宏
静鎮」の三字が加筆されてあるのを除き、その他の佚文は、おおむね
適切に処理されておらず、また妥当ではないように思われる。

以上が、『水経注(抄)』に対する、いささかの卑見である。本書は、
上述したとおり、いくぶん満足できない所はあるが、これらの欠点は、
すべて優れた成果をなしくずしにするものではない。『水経注(抄)』
は、鄭注最初の外国語翻訳書であるばかりでなく、同時にまた、現存
するすべての鄭注版本の中で最も新しい版本である。このような版本
に対して、われわれがやや過分な要求をするのも、情としてやむを得
ぬことである。私のこの心情は、必ずや日本の学者の理解を得られる
ものであろう。中日両国の鄭道元研究者が手を取りあつて努力し、
『水経注』研究の水準をより高めたものである。

註

①②③「論水経注的版本文」、『中華文史論叢』一九七九年第三集に掲載。

④各家のうち、ただ岑仲勉だけ単独の『水経注』校本が無く、岑氏が撰した『水
経注卷一箋校』を指すと思われる。もと、一九三三年『聖心』第二期掲載。

さらに、一九六二年、中華書局『中外史地考証』上册に所収。

⑤同論文に列記した以外に、一九七九年秋、天津市人民図書館館長黄鉦生氏の
快諾を得、同館が苦勞して大切に保管してきた小山堂鈔本全祖望の『五校水
経注』を閲読した。

⑥昭和十八年、日本、京都、東方文化研究所編。

⑦卷四河水篇の経文「又南過河東北屈縣西」の注に「河水又南得鯉魚」と
あり、大典本、黄省曾本、注箋本、譚元春本、何焯校明鈔本、王國維校明鈔
本、沈炳巽本、張匡學本、沈欽韓稿本等は、なべて殿本と同じである。但、
殿本は文の後に、「又有脱文、応作鯉魚澗」という按語を付す。注疏
本は鯉魚澗に作る。孫潛校本と小山堂五校鈔本は鯉魚水に作る。趙一清『水
経注箋刊誤』卷一には「鯉魚下落水字」とある。今、『水経注(抄)』は、
鯉魚澗に作る。但、「鯉魚」の下は、結局のところ「澗」か「水」(の字)
であるが、確定する方法もなく、共に証明の助けとなるものがない。

⑧吉祥草 (Reineckea carnea) 百合科多年生常綠草本、梵語 शुद्ध (K-usa) 以作。

⑨「編纂水經注新版本芻議」、(近く発行の)福建人民出版社『古籍論叢』(社会科学戰線叢書)に掲載。

⑩「水經注の地理学資料与地理学方法」、『杭州大学学報』(自然科学版) 一九六四年第二卷第二期に掲載。

⑪「原文」『通典』卷一百七十四、古雍州下西平郡「水經所云、河出崑崙山者、宜出於焉本紀山海經、所云南入葱嶺及出于闐南山者、出於漢書西域傳、而鄭道元都不詳正、……漢書西域傳云、河水一源出葱嶺、一源出于闐、合流東注蒲

昌海、皆以潛流地下、南出積石為中國河云、比禹紀山經、猶校附近、終是紕繆。」。

⑫「原文」「河水出崑崙自古言者皆失其實。……鄭使大夏、見葱嶺于闐二河合流、注蒲昌海。其水亭居皆以為潛行地中南出于積石、為中國河。此乃意度之、非實見蒲昌海與積石河通流也。」。

⑬「入水經積石辨」(『群書疑辨』卷十所載)「況東方之積石、乃兩山夾峙、河流其間非冒也。……鄭道元之注最善、于此亦不能辨、孰謂此書為不刊之定論哉。」

⑭「論水經注的佚文」、『杭州大学学報』(自然科学版) 一九七八年第三期に掲載。